古代埃及の藝術に就いて

松本文三郎

一

埃及の藝術の果して何時から創まつたかは今尙ほ不明である。其歷史時代に入つてからは旣に著しく進步して居るのを見ても其文化の此時を以て始まつたのではなく、歷史以前少くとも數百年からして徐々として其原始時代を脫しつゝあつたものと思はれる。今日其稀に存する古墳より發掘する所によれば、燧石の小刀、矢鏃、乃至槍身等の武器と共に、粗製幷びに精製の布片、金屬の珠數玉、胸飾、足環杯もあり、多少金屬細工の術をも知つて居たことが判る、殊に其陶器の如きは素燒のものではあるが、或は白或は赤の顏料を以て渦卷や草葉の模樣を附し、時あつては單純ながらも船の圖抔を描いたのもあり、着色した土偶杯もある、而して其形よりして之を見れば確かに後世に於ける埃及の彫刻や土偶の先驅をなすものたるを疑はぬ。元來埃及人種の起源に就いても今尙ほ甚だ明かならぬが、普通一般の說では所謂ハム人種な

るものが、紅海を渡つてナイル流域に入來つたものといふ。勿論ハム人種が入來つたとしても爾來彼が純粹に其血統を持續した譯ではなく、後世セム族や、又多少黑人の血の混することもないではなからうが、先づ大體に於てはナイル流域にはアラビヤ人やバルバリ(Barbari)と最も近い人種が住して居たものらしい。若し果して然りとすれば彼の移住と共に一定の文化を將來したのではなからうかとの疑も生ずるが、少くとも新石器時代と歷史時代の始に於ける遺物は連續發展の迹を示し、何等急遽の變化を認めざるを以て見れば、彼等が移動の時に於ける文化は尙ほ頗る幼稚なるものであり、其發展は全くナイル流域に於て成されたことが判る。

埃及の歷史時代とは西曆紀元前少くも三四千年の頃、Menes 王が上下埃及を一統したるに始まる。而して此第一王朝及び第二王朝、約四百年の間には、歷史前の文化を繼承し、更らに一層之を發展せしめ、今や石器の使用よりも金屬特に銅器が最も普通に用ゐられ、金屬を鑄て諸種の裝飾品を造つたのみならず、其象牙若しくは獸骨の上に彫刻したる人物特に動物像の如きは、勿論尙ほ幾分生硬を免れぬが、其形態輪廓頗る穩當にして、其技巧亦賞讃に價するものである。又アラバスター等の寧ろ硬質の石材を磨し、若くは穿ちて造れる皿瓶の類の如きも、甚だ精巧の域に達する。文字

の彫刻も亦此時代よりして始まる。此二王朝の間には未だ著しき大作を遺すに至らぬが、併し其一般社會の文化幷びに藝術の方面に於ては急劇の進歩を成しことを知るべきである。

第三王朝から第六王朝に至る(西暦紀元前二九八〇—二四七五年)約五百年は、史家の所謂古代帝國時代であつて、埃及の藝術は殆んど其頂點に達した。其現存する遺品必らずしも多くはないが、古今未曾有の、而して又世界に卓絶した大作を遺した。第一王朝時代よりして銅の發掘をシナイ山に試みて居たが、此時代には頗る大規模に之を擴張し、其國内の需要を充足せしめ、石材(石灰石)は之をアラビヤの山脈に取り、何れも豊富に之を使用するを得た。政治上にはヌビアの種族を討つて之を南方に驅追し、國運の隆盛を招致した。埃及といへば必らず何人も直ちに連想する金字塔は、卽ち此時代に於ける諸王の捌むる所たるのみならず、又其最大のものを建築した。Sakkara の step pyramid は第三王朝(紀元前二九八〇—二九〇〇年) Zoser の造る所、Gizeh に於ける大金字塔を始め此一群のものは、第四王朝(仝二九〇〇—二七五〇年) Kheops (Khufu) の父子兄弟等の作る所である。彫刻にあつても、石像あり木像あり、何れも多少古拙の點は免れぬが、神采奕々として其能く雄大なる氣分を顯はすは、建築

に於ける彼金字塔と相匹疇すべきである。特に五千年以前の木彫人物像の今に至るまで殆んど完全に保存せらるゝが如きは、埃及にあらざれば殆んど不可能の事實であらう。墳墓内の裝飾も亦此時を以て始まる。彼金字塔其他墳墓内部の廣間若くは棺室等の四壁に美妙なる浮彫を鐫し、或は諸神の供養祭典を顯はし、或は戰爭捕虜等の如き政治社會的狀態を捕き出すは、一面當時藝術家の如何に優秀なる技巧を有したるかを示すと共に、又他面には古代埃及の社會狀態を知るに最も有益なる材料を給するものである。而して普通此等の巨大なる面積に於ける裝飾に用ゐらるゝ深浮彫(reliefs en creux)の法なるものは、實に第四王朝に始まり、第五王朝に至つて最も盛となつた。勿論此法は後世埃及人の永く採る所ではあるが、到底此時期に見るが如き優秀なる作品を認めぬ。之を要するにかの Menes 王の埃及を一統してより既に四百年の豫備時代を經過したので、國運の益隆盛を來したると共に、諸種藝術的需要を生じ、藝術家も愈其技工を錬磨し、此に是等大作を製するに至つたのであらう。而して當時は希臘文明の先驅をなせる所謂 Minos の藝術なるものも、僅かに其曙光を認めんとする時であり、彼等は未だ其特殊の伎倆を發揮するに至らず、寧ろ埃及よりして其感化を受けざるを得ざる狀態にあつたのであるから、埃及は其政治的幷び

に文化藝術に於て殆んど世界に獨歩する觀があつた。是れが抑も當時製作の建築と彫刻とを問はず、何れの範圍に於ても自から雄大の氣分を發揮するに至つた所以ではなからうか。

埃及に於ける繪畫の遺物は、後にも說く如く第十八王朝時代にあらざれば、未だ多く顯はれないのであるが、當時始めて此術の開けたのではなく、遲くも上古帝國時代には既に著しく發展して居たのである。彼壁面や棺側に於ける浮彫なるものは、印度の窣堵波の玉垣や門に彫刻せられたるそれと同じく、彫刻としてよりも寧ろ一の繪畫として觀るべきである。而して此等彫刻を作るに當つては、先つ壁面に豫め墨を以て人物動物等今彫刻せんとするものゝ形像を描き、然る後之を鐫したとは、其半成浮彫の遺物に於て之を認め得る。果して然らば、當時繪畫の存せざる理由はない、否當時にあつては既に彼浮彫と同じく精巧なる繪畫の存したことを推測するのは寧ろ當然であらう。果せる哉第三王朝の遺品と稱せらるゝ鵝鳥の圖なるものあり、今尙其寫生の妙を賞せらる。之を以て彼浮彫に對比する亦劇かに其優劣を判ずべからざるのである。但當時の殿堂幷びに墳墓の裝飾には、繪畫を以てするよりも浮彫を以てすることが流行し、又是れが一層耐久的であつたが爲め、餘の繪畫は悉く消

滅し、浮彫は其建築と共に今に存するを得たものと思はれる。何れにしても當時の繪畫の今に存するもの、彼に Meidum に發見したる鵝鳥の圖を除いては殆ど全く之なきはは吾人の最も遺憾とする所である。併しながら幸ひに其浮彫の存すること少からず、特に此等浮彫には人物あり、動物あり、其取材諸種の範圍に渉り、而も何れも着色せらるゝにより、當時の繪畫も略其一般を推測し得ないではない。

埃及人が石材を取扱ふ術に於て特に卓絶した伎倆を有して居たことは、彼歴史以前の石皿等に就いても容易に之を知り得るが、此時代に至つては特に長足の進歩をなしたやうである。雷に石灰石の如き比較的軟き材料に於てのみならず、第四王朝大金字塔の製作者たる Kheops の棺、若しくは其の弟 Khephren (Khefrè) 墳墓の祭殿たる所謂「花崗石殿」の如き、何れも硬質の花崗石を磨き造り、又た時あつては細線を以て諸種の模樣を明確に彫鐫したるに見ても、如何に其の技工の巧妙であつたかゞ判る。ヘロドタスが神几や彫像や殿堂や乃至石像の彫刻は、何れも皆な埃及人の創むる所にして、希臘は之れに倣つたのであるといふのは恐らく事實の眞を得たものであらう。

さしも一代の榮華を檀にしたメムフキス (Memphis 上古帝國王朝の都)王朝も其中

葉よりしては次第に紀綱弛み、中央の顯官幷びに地方の豪族は、私かに恩を施し、德を殖え、各其地に於て割據の勢を成し、第六王朝の末期に至りては、何人も能く之を統御するを得ず、上古の帝國は此に瓦解し、自から諸侯分立の狀態となり、彼等は互ひに相爭ひ、殆んど寧日なかつたのである。斯くして其藝術なるものも亦地方的となり、唯古の法を襲踏したるのみで、何等の新見なく、規模亦局小にして殆んど見るに足らず、政治上の暗黑時代と共に藝術上の暗黑時代を顯出した。

第十王朝に至つて一度上下埃及の統一成らんとしたが忽ちに其事敗れ、第十一王朝の Antef 及び Mentuhoteps 漸くにして之を成就し、第十三王朝に至り、始めて彼等土豪を討つて之を平げ、此に再び鞏固なる埃及帝國なるものが再現した。で歷史家は第十一王朝より第十四王朝に至る約四百五十年の間(約紀元前二一六〇—一七〇〇年)を中古帝國時代と稱する。此時代、殊に第十二王朝(紀元前二〇〇〇—一七八八年)は埃及史上最も盛大なる時期にして、文學藝術も榮え、國內如何なる都市に於ても當時建築の作られざる所はなかつたともいはるゝ。埃及人が其沿岸航路によつて近海諸國と交通來往して居たとは、上古帝國時代よりして既に行はれたところであるが、更に其規模を擴張し、Sesostris 一世幷びに三世は共にヌビアを討つて之を平げ、

其武勇は永く後人の傳唱する所となつた。斯く國運の再び隆盛となるに隨ひ、藝術亦勃興し來つたが、當時其理想とする所は、數百年間行はれた地方的藝術の陋習を破りて上古帝國時代の盛時に復せんと欲するにあつた。で此時代の製作は專ら上古時代の藝術を學び、之を摸倣せんと努め、時としては其神像の如き一々の線に至る迄古代の製作を摸し、一意之に違はざらんことを欲した痕迹がある。だから其製作の迹より之を大觀すれば、上代のそれに比し更らに一層精巧の域に進んでは居るが、殆んど新鮮の氣分に缺け、徒らに纖細なる技巧の末に沒頭したる傾向を免れぬ。斯く古來の形式を墨守する弊はあるか、其技巧の錬磨は丸彫に浮彫に、至る所として可ならざるはなく、雄大の氣分はないが、纖細の美は確かに存する。又纖細なる技巧に熟錬したが爲め、金屬寶石の裝飾品の如きに至つては、其精妙殆んど古今に冠絶する、而して其自然色を應用したる寶石の種類も、上古のに比し遙かに多くなつた。尙ほ此期の藝術に於て注意すべきは建築に所謂原(プロト)ドリック柱を用ゐたることゝ、巨大なる石像を多く製作したることゝである。

中古帝國も第十三王朝に至つては既に尾大不振の狀を呈し、中央政府の權力も地方に及はず、恐らく上下埃及も既に分裂したものゝ如くである。而して第十三王朝

の末期にはHyksosなるもの(セム族にして東方より埃及に入來るものといふ)の爲めに王位を簒奪せられ、此に再び暗黑時代を顯出した。勿論Hyksosなるものは下埃及に君臨したので、上部埃及に迄は其勢力の及ばなかつたものと見へ、此間には斷えず騷亂相續いだらしい。だから此時代には勿論藝術杯の起るべき筈はなかつた。

二

外人と埃及人との騷亂は一百餘年の間繼續したが、遂に勝利は埃及人の掌中に歸し、紀元前一五八〇年、第十七王朝の始祖 Ahmes 王は Hsksos を討ち、其本據 Avaris を拔き、彼を國外に放逐し、國內不逞の徒を鎭定し、再び埃及を一統した。是時に當つてやシリア、バレスチナは無數の小都市に分裂し、バビロンの王國亦萎靡振はず、彼等は唯エギトンナ海よりペルシヤ灣に幾多の船舶を泛べて、通商貿易に其精力を集注したのみで政治上に於ては到底新興の埃及王朝に抗すべくもなかつた。で第十七王朝の Amenophis I (Amenhotep) 幷びに第十八王朝の Thutmosis I. は相續いでバレスチナを通過し、シリアに遠征を企て、遠くユーフラチス河に達し、彼等をして每歲朝貢を怠らざるを約せしめた。併し十八王朝の中最も有爲なる君主としては何人も先づ指を

Thutmosis III. に屈せざるを得ない。埃及は王に至つて古今未曾有の盛況を呈したのである。彼王は其の軍旅を動かすこと十七回、啻に國内の叛徒を威壓したのみならず、フェニシヤの沿岸諸港を以て根據地となした。是に於てがバレスチナ、シリア、北メソポタミア、地中海の諸島から亞細亞の Hittites 乃至バビロン王國に至る迄は、皆其制を仰ぎ、埃及をして宛も當時世界の唯一主權者であり、又世界唯一の帝國たるの觀を呈せしめた。

斯くして埃及は世界の中心勢力となつたので、東は亞細亞より、南はヌビアより、各種の人種皆其首府 Thebes に集まり來つた。中には浮虜あり雇兵あり、使節あり商人あり、又埃及王の一族と相婚せる外國婦人もあつた。遠征奪略によつて獲られたる鉅萬の財寶、王宮に收藏せられたのみならず、毎年朝貢によつて將來する貨物、ヌビアの金、象牙、獸皮、家畜、地中海諸島シリア、シナイよりの銀、銅、鉛、寶石、レバノンの杉材、アラビアの香木、香料、フェニシア、クレートの金屬細工織物は皆此世界の中心地に向つて流れ來つたのである。埃及王は今や此豐富にして無限に均しき財寶を傾け、之を藝術の上に集注した。中古帝國以後、久しく自然の頽廢に歸して、顧るに遑なかつた全國に通じての幾多の殿堂を悉く修繕改築し、尙ほ其の故都 Thebes を裝嚴し、世界の中心

都會たるに價せしめんが爲め、ルキソル、カルナックを始め、多くの殿堂を新たに建築した。現存する埃及殿堂の殆んど總べてが當時の改築に成らざるなきは全く之が爲めである。殿堂の改築修繕は勿論彫刻繪畫其他所有藝術の需要を來し、又藝術家の伎倆を奬勵することゝもなるのは必然の結果であるから、一切の藝術は此王朝に至つて殆んど其隆盛の極に達した。建築は論を俟たず、彼第五王朝以後久しく衰退し來つた浮彫も、此に再び復活し、繪畫亦此時を以て最も盛となり、今に其遺物の發見せらるゝもの尠からぬ。

當時の技術家も勿論大體に於ては上代の藝術を繼承するものではあるが、第十二王朝の技術家に於けるが如く一點一劃も唯舊法を墨守するを以て足れりとなすものではなかつた。彼等の眼界は今や世界的となり、舊來の形式を脱して何等か新見創意を發揮せんとする傾向は確かに存在して居たものゝやうである。で當時舊殿堂を改修するに當つても、大體の輪廓は勿論舊に據つたのではあるが、必らずしも一々之に盲從せず、其規模を擴張したるはいふ迄もなく、又其構造をも頗る復雜ならしめた。之が爲め反つて其建築の中心を失はしめ、古代簡素の趣を損するが如き結果を招來したこともないではないが、其必らずしも舊を墨守せざるの精神は此に其一

端を窺ひ得るのである。又彼塔門(後節之を詳說す)の如きも、中古王朝に至る迄は、何等彫刻を施さなかつたのに、此時代には全部浮彫を以て裝飾したるが如き、若くは中古には原ドリック柱なるものゝ盛に用ゐられたるに、此王朝の建築には一切之を用ゐず、蓮花幷びに、パピラス柱の多く顯はれたるが如き、將た殿堂の浮彫は從來多く神と國王との接見にあらざれば、王者の武功を描き出したに止まれるに、今や日常生活に於ける種々の光景の描出されたるが如き、何れも皆時代精神を顯はし出したものであらう。特に十八王朝のAtomenophis IV. (1375-1358 B. C.)が古來の埃及宗教の多神的にして又地方的なるを排し、Atonなる日神を中心とせる唯一神教を宣傳したるが如き、例令ひ其動機はテーベスを中心とする新宗教を樹立し、王權と神權とを合同せんとする疑なきしもあらずとしても、又假令ひ當時僧徒の反對に遭ひ、能く其の意志を實現せしむるまでには至らなかつたとしても、兎に角斯かる社會にあつて斯かる運動を起さんとしたことは、既に彼の舊習に拘束せられず、形式を打破せんとする精神の最も大胆に發露したものといはなければならぬ。而して吾人は之に由つて第十二王朝と第十八王朝との兩時代の間には、思想上に大なる變化のあつたことを認めざるを得ない。但此に吾人の最も遺憾とする合は、彼所謂ミノスの藝術なるものも、

當時は尙ほ頗る幼稚であつて、寧ろ埃及より感化せらるゝことがあつても、埃及に刺戟を與ふるには不十分であつたことである。若し埃及以外の地に於て少くとも之と雁行すべき藝術を有する國土があり、之によつて埃及の藝術家が多少の新たなる材料や手法を學び得たとすれば、埃及の藝術も更らに一層の進步發展をなし、新面目を開いたことであらうと思ふ。然るに國家新興の奎運に際し、數百年來錬磨せられたる伎倆を有し、勃々たる勇氣を以て何等か一生面を開拓せんと欲したるに、彼等は不幸にして之を刺戟する何物をも有しなかつたが爲め、未だ甚たしく舊圈檻を超脫するに至らなかつたのは、埃及のみならず、世界藝術の爲め實に千歲の恨事といはなければならぬ。

斯く第十八王朝の藝術家は其眼界の局限せられた爲め、革新的の大發展を成すを得なかつたが、併し上古帝國時代の製作に比し、自から其趣を異にするものゝあつたのは亦當然の顯象といはなければならぬ。上古の彫像は總じて沈鬱的にして、其容貌態度何れも嚴肅の風を有して居たに反し、今や其製作する所は一般に愉快に快活の氣分を顯はすに至つた。前者は顏面にのみ全精力を盡くし、其他の點に於ては一定の約束に隨つて殆んど何等の勞力を費さゞるに反し、今や顏面より手足の末に至

る迄、殊に其衣服裝飾の如きには、最も細心の注意を拂ひ、其勞力を惜まなかつた。斯の如く全身に渉り、微細なる注意を拂つたにより、自然に寫實的の傾向を生じ、古代藝術家の單に約束として顧みなかつた點も、悉く之を改善し、眞を寫すに努力した。其結果當時の彫像には生氣充滿し、宛も活躍せんとするものゝ如く、である、が若し其弊をいはゞ、吾人が一度び古代彫像に對すれば何となく深淵に望むが如く、奥底知れざる遠大の氣分に擊たるゝのであるが、當時の製作には此氣分なく、技工に於ても纖細に流れ、大膽にして力ある印象を與え得ないことである。是れは宛も希臘に於ける紀元前五世紀以前の Archaic 時代の彫像と五世以後其最盛期に於けるそれとの如く、又支那六朝時代の彫像と唐代のそれとに於けるが如くであつて、何れの國土にあつても勢の免るべからざる所である。

三

等十七王朝より二十王朝に至る(西曆紀元前一五八〇—一〇九〇年)間を新帝國時代と稱する。此時代の初には國王の權力强大にして能く土豪割據の勢を制したが、第十八王朝以後には僧侶の財産幷びに特權次第に增長し、遂に之が爲め王位を簒奪

せらるゝに至つた。第二十一王朝なるものは卽ち是れである。が二十一王朝も忽ちにして分裂し、國家の主權は外人の手に歸し、紀元前九四五年より同六六三年に至る約三百年間の埃及は、或はリビア人、或はエシオピヤ人、或はアッシリア人の爲めに侵略せられた。彼等が埃及藝術に對し何等貢獻する所あらざるは言ふ迄もない。埃及土王の一なる所謂 Saïs の Psammetichos なるもの起り、アッシリアのバビロン等と兵を交ゆるの機に乘じ、其羈絆を脫し、再び全埃及を統一し、此に第二十六王朝紀元前六六三—五二五年)を立つるや、埃及の文學藝術亦一時の盛を稱せらる、埃及に於ける文藝復古期と稱するは卽ち此時である。併しながら當時の埃及人は依然として尙古の思想に囚はれ、假令ひ希臘人の或は雇兵として、或は商人として、多く埃及內地に入來れるが爲め、多少其建築等に於て新形式を採るに至つたとはいふものゝ、大體に於ては唯上古帝國時代の藝術を復興せしめんとするに止まつた。で或は金字塔を修繕し、其殿堂を改築し、或は民間には次第に通俗的文字(Démos 人民)の使用せられたるに關はらず、古代の象形文字を學習せしめ、甚しきは古代貴族の尊號すらも之を復活し、其功臣に授くるに至つた。藝術の上にあつても、今日其遺品によつて之を見れば、可なり精巧なる作品を出すに至つたが、勿論上古雄大の氣分はなく、十八王朝に於

ける製作よりも更らに一層寫實的にして纖巧に流れたるは蔽ふべからざるのである。而して尙ほ著しく希臘作風の痕迹を認むるには至らぬが、特に建築の柱頭の如きは後世希臘時代のそれの先驅をなすものもあつたと傳ふるを以て見れば、彫刻の範圍に於ても多少其感化を受けなかつたとはいへぬ。

二十六王朝時代は、一方にはバビロンの zebuchadnez zkar 王の下國威赫振するあり、他方には希臘殖民地の勢力發展しつゝある時であつたから、埃及王も屢シリア、パレスチナの恢復を企てたが成功せず、遂に之を放棄するの止むを得なきに至り下埃及のナウクラチスをも希臘殖民地となし、更らに他方にはリビア叛徒の騷亂あり、內外頗る多事、紀元前五百年代の中葉よりしては國運次第に傾き、五二五年には彼斯の Cambyses の爲めに其國を奪はれ三三二年には亞歷山大王の侵す所となり、其領土に歸し、仝三〇年には羅馬の叛圖に加へられ、更らに降つてはビザンツ王、波斯人の領する所となり、最後紀元後六四〇年よりは亞羅比亞に併呑せられ、埃及本來の文明は此に其終を告げたといつて差支ない。

尙ほ終りに一言注意して置かなければならぬことがある。埃及人は本來同化力に富んで居た爲めか(動物の如きは一度び埃及に移殖せらるゝや、何れも埃及の特色

を有するといふ(將た外人の埃及統御上の制策の爲めか、或は此等兩者の合同して起つた顯象かと知れぬが、何れにしても外人の埃及に入來つたものは、多くは夙に其國風に化し、殆んど其自國の文化を輸入し來らざることである。リビア人やエジオピヤ人の如きが早く埃及に同化し、埃及式の藝術を模倣製作したことは論ずるを俟たぬが、波斯人の如き比較的早く一定の文化の域に達したものにあつても、カムビセス以來一百餘年の間埃及を領したに關はらず、又ダリユス以外の諸王は必らずしも埃及宗教に對し同情を有したものでなかつたにも拘はらず、波斯文化の影響は埃及藝術の上何等其痕迹を止めぬ、而してダリユス王は其波斯軍戍衛地たるKhârgehに日神アモンの殿堂を作つたが、其構造全然埃及式である、のみならず、其壁面には波斯王が、埃及國教の長老として神前に歸敬する圖を描出してある。亞歷山大王が埃及を征服した時も(其れは勿論政策上からであらうが)アムモン神託の地たるAmmonium卽ちSîwehに巡禮し、又テーベスの神アモンの殿堂の一部として神殿を再建し、其內外壁面に王のアモン幷びに其他の神前に供養する圖を顯出してあるが、其手法はいふを俟たず、王の服裝に至る迄全く埃及人と異ならぬ。其他羅馬時代の諸王の彫像も今尙ほ埃及に存するもの少からぬが、是れ亦前と同樣である。勿論アレキサンドリア

を始め其他の地方に於ては、プトレマイオス王の時代よりして多少希臘の感化を蒙むつたものもある、例へば彫刻の顏面は全く希臘人であつて、衣服は埃及人なる、もあり、又之に反し顏面は埃及人であつて衣服の希臘風なるもある如きである、此等は或は當時實際行はれたことであるかも知れぬ。又日常の家具の如きは純粹希臘式のものも多く存するが、希臘人にして全く埃及式に其屍體を木乃伊とし、埃及風の棺に收しめたものゝ少からず發見せらるゝものあるを見ても、當時一般社會の傾向は推て知るべきである。で希臘羅馬文藝の最盛期にあつても、其埃及藝術の上に及ぼした影響の極めて微弱にして、又其影響の存する所も甚だ小部分に止まることを認めなければならぬ。而して埃及藝術の革新は竟に此に顯はれなかつたのである。

之を要するに古代埃及の藝術は上古帝國時代に於て既に最高潮に達し、爾來次第に衰退したるもの、中古第十二王朝に至り稍之を復活したが、到底上古に及ばずして、國內の騷亂と共に忽ち萎靡し、新帝國時代、特に第十八王朝に至り、埃及藝術は其所有方面に於て發展の極に達し、形式手法共に遺憾なきを得た。十八王朝以後二千年の間は、唯樣に依つて胡蘆を描くのみ、紀元前六百年代二十六王朝の起るに及んで、文藝

復古期を顯じ一時の盛を稱したが、是れ亦久しからずして亡び、希臘羅馬時代には此兩者の混合藝術を製作したが、未だ多く見るに足らず、又後來一新局面を開くに至らず、埃及藝術は斯くして此に其終を告げたのである。（未完）